

「これだけは身に着けて欲しい発音と初級文型の教えかた」座談会記録 日本語簡訳版

2023 年 2 月 26 日初稿

(詳細は[中国語版《如何教好汉语语音基础和基本句型?》座談会記録](#)参照)

座談会講師: 牟世栄先生 1(履歴付録) 聞亭先生 2(同左)

整理 & 日本語訳: 砂岡和子 3 向凌萱 4

1 北京語言大学漢語進修学院副院長准教授 2 北京語言大学漢語学院准教授

3 早稲田大学政治経済学部名誉教授 4 早稲田大学人間科学学術院学部院生

連続座談会日程とテーマ

一回目会議: 2022 年 12 月 28 日(北京時間 13:00~15:00、日本時間 14:00~16:00) Zoom Meeting。

北京語言大学の牟世容先生と聞亭先生を招き、『初級中国語授業のインターアクション』をテーマに科研チーム内で開催した。

二回目会議: 2023 年 2 月 9 日(北京時間 9:00~11:00、日本時間 10:00~12:00)。

再び牟世容先生を招き、Zoom 公開座談会を開催。研究チームのメンバーを含め、日本国内の中国語教師計 30 人が参加。今回のテーマは「これだけは身に着けて欲しい発音と初級文型の教えかた」。

二回の座談会はいずれも成功裏に終了した。第二回目の会議後、主催者が座談会参加者にアンケート調査を実施した。回答結果は、大半の参加者が本会議の内容に満足したと答えた。例えば、「今回の座談会は課題解決に役立ちましたか?」、「講師の話の内容に共感しましたか?」という設問に、「非常に役立った + 役立った」、「非常に共感する + 共感する」と回答した割合はどちらも 90% 以上となった。「どこに共感しましたか? (複数選択可)」という質問への回答では、多い順に「多様な教え方のテクニックを学んだ」、「オンラインとの組み合わせで、対面授業の内容をもっと豊かにできる」、「教え方を変えれば、学生が主体的に学ぶようになる」が上位を占める。アンケート回答から、日本の中国語教師が総体的な授業時間不足の状況下、どのように学生の積極性と学習態度を引き出し、予復習など課外学習の達成率を高め、グループ活動やペア活動を上手に授業に組み込んだらよいのか、解決策に期待していることがわかった。

座談会で教師たちが印象に残った内容は次の点で。

中国語の発音基礎指導について

- ・日本の学習者に特化した苦手な発音と指導方略について、例示と詳しい説明があったおかげで、授業への取り入れかたを具体的にイメージできた。

- ・「唇と舌の位置の変化を反復練習」する指導法は、日本の学習者が発音部位を掌握し、発音の癖を治すのに役立つ。

- ・日本の外国語教育は総じて完全習得を目指して正確なインプットとアウトプットの反復を重視する傾向がある。日本人にとって習得が難しい発音を重点的に攻略すれば、応用練習に時間を回すことができ、学習モチベーションも喚起できる。
- ・多人数初級クラスの授業テクニックに共感した。本座談会は経験の浅い教師に非常に役立つ。
- ・「他言語と比べ、日本人が中国語の四声を習得するのはそれほど難しくない」という指摘は新鮮だった。

中国語の初級文型指導について

- ・「把」や「～来、～去」の教え方は非常に面白い。
- ・イラストを使って方向補語の用法を視覚的に提示する方法は大変参考になった。
- ・画像を使った文法の教育は非常に効果的なので、日本人学習者が苦手な点に焦点を絞った中国語の教学リソース開発の余地があると感じた。
- ・文型指導の7種のテクニックについて、具体例と詳しい説明があり大変参考になった。
- ・一方的な尋問式対話を避け、パターン練習を行う具体的な方略が理解できた。

まとめ

- ・シラバスやテキスト準拠でも、教師の重点項目の選択や、教学方略の巧拙によって、授業にゆとりが生まれ、かつ活性化が可能なが分かった。
- ・学習意欲を引き出すには、(教材、タスク、ゲームなどの) 授業準備が非常に重要であるとわかった。
- ・MOOC と授業プラットフォーム、それと教え方が非常に実用的である。
- ・授業時間不足や教師の資質不足という欠陥を補うため、日本の教師は良質かつ共有可能な教材を求めている。日本学生が使いやすいように、教材は日本語の説明を提供するのが望ましい。日本の学会や出版社には、教材用イラストなどの素材を盛り込んだデータベースを構築してほしい。
- ・牟先生は積極的に ICT 言語教育を推進しているが、今回の内容は構造主義教育の理念に基づき、AI に勝る対面授業の魅力と指導効果を挙げ、教場でのインタラクションを強調していることが分かった。
- ・国際中国語教育で中国語発音基礎と初級文型をどのように教えるのか、私の認識は講師と完全に一致する。だが日本と中国では教育や学習環境が異なり、日本にいる学生と中国で勉強する学生は学習動機も大きく違う。北京語言大学の教え方やテクニックをそのまま日本に当てはめることはできない。教養科目としての日本の中国語教育に応用するのは非常に難しいと思う。しかし、教師として、中国語と中国語教学の知識を正しく身につけることは授業を担当する最低条件である。日本では教師に対する要求、教師の養成、教員研修の機会などの面で、あまりにも不十分と言わざるを得ない。
- ・多くの日本人教師が多忙のため、自身の授業に問題があることに気づいていない。牟先生が

紹介した新しい教え方や多様なテクニックには非常に興味があり、常に学ぶ姿勢を維持すべきと感じた。

第一回 北京語言大学専門家と日本の教員の座談会記録 2022 年 12 月 28 日

会議テーマ: 初級中国語授業のインタラクション

牟世栄先生講習テーマ: 初級段階の発音教育

聞亭先生講習テーマ: ハイフレックススペースのインタラクション

会議形式: 各専門家による 30 分間の講演後、日本側の教師との質疑応答が続き、最後に全員で以下のような日本の初級中国語課程の課題について総合討論を行った。 1. ゼロから始める中国語学習者に発音基礎をしっかり身に着けてもらいたいが、単調な発音練習を避け、多人数学生の発音レベルを把握するにはどうしたらよいか? 2. 日本人学生は手を挙げない。どうしたら学生が自発的に質問に答えるようになるか? 3. 初級中国語学習者に対し、効果的な質問をし、教師と学生や学生同士のインタラクションを通じ、深い思考へと導くことができるだろうか?

第二回 北京語言大学専門家と日本の教員の座談会記録 2023 年 2 月 9 日

会議テーマ: これだけは身に着けて欲しい発音と初級文型の教えかた (第二回)

牟世栄先生講演テーマ: 同上

会議形式: 一回目と同様

科研チームが事前に牟教授に質問した内容は以下の通り:

1. 最近の発音や語彙指導の最適個別指導法やテクニックを紹介してください。
2. 学生間の中国語レベル差が大きいクラスで、全体のレベルアップを図るには、どのような授業活動が有効か。レベルの低い学生に重点を置くべきか、それともレベルの高い学生に重点を置くべきでしょうか?
3. 学生 30 人の 60 分間授業で、全体と個別指導の時間の配分をどうすべきですか?
4. 教師がチューター (TA) と協力し、個別学生にフィードバックを与えるには、どのような仕事分担がよいですか?
5. 日本の多くの大学は TA を設置していません。優れた AI ツールを活用し、教育資源を補うことは可能ですか?

以下、牟先生二回目の講演を主に、一回目の内容講を補足してまとめた (文末参考文献とプラットフォーム情報を参照)。

一、初級段階の発音教育

(一) 発音教育の課題

1. 発音教育の重要性: 初級中国語教育の三段階の内、発音教育は第一ステップで、学習者が

中国語を学ぶ時の最初の通過点として非常に重要である。発音教育が重要であるからには、その教育について深く分析し、効果的な教育方法を探究し、外国語としての中国語教育の質を高める必要がある。ゼロから始める初級クラスでは、3～5 日間、集中して発音教育を行った後に、それ以外中国語の知識教育を展開する。

中国語によるコミュニケーションでは、音声が多量の言語情報を含み、同じ単語でも発音の違いによって異なる意味を表すことがある。中国語音声知識の習得と運用は、正確に情報を受信して返答し、コミュニケーションの目的を果たすための基礎である。従って中国語の発音能力は、当人の中国語レベルを測る重要な指標であり、外国語としての中国語教育においても、発音教育はコミュニケーションスキル習得のための重要な手段とされる。中国語の知識体系の中で、音声表現の意味は、中国語を使用するすべての社会構成員によって共同で規定されている。そのため中国語の音声はあらかじめ決まった社会的属性をもち、その社会的属性が発音知識習得において一定の困難をもたらす。より優れた中国語教育を行うには、発音教育に重点を置き、学習者指導と支援を強化し、本人の中国語コミュニケーション能力がより迅速に向上するよう促す必要がある。

2. 中国語の発音特徴（略）

3. 中国語と日本語の発音差異

中国語と日本語はそれぞれ独自の音声体系を有し、完全に一致する母音は存在せず、子音もそれぞれ異なる音素対立のグループがある。

（二）日本人学生への発音教育ポイント

日本の学生が中国語の発音を学習する際、知覚難度が最も高いのは、後鼻音、そり舌音、単母音「e」の順である。母音では「a」、「i」が一番易しい。声調はあまりの難しくない。（中略）

（三）発音教育のプログラム方略

1. 言語学的根拠に基づく方略

学習者は言語学者ではないので、異なる言語の属性や特徴について知識がない。自身の母語と目標言語の言語学的特徴、属性、本質的な違いを理解できないため、意識的に母語の発音スタイルを捨てることができない。

教師は授業中、学生に両言語の言語学的属性や特徴を体系的に理解させ、発音スタイルや習慣の違いを認識し、母語の発音システムから目標言語の発音システムへと転換できるよう導く必要がある（略）。

異なる音韻特徴が異なる発音スタイルを決定する。日本の学生への教育では、言語学理論や発音体系を明瞭に説明する必要がある。学習者がこれらを明確に理解できれば、中国語の発音システムに接続でき、できるだけ口を大きく開け、唇を丸くし、大きな動きで力を入れ、誇張して発音するようになる。

2. 教育内容の配置方略

（1）易しい発音から難しい発音へ

どんな言語教育も段階を追って徐々に進める原則に従う。中国語発音教育も例外ではない。中

国語発音の難易度に従い、次の順番で子音と母音の習得を行う：(中略)

(2) 母音と子音を一緒に教える

声母または韻母を単独で教えるより、両方を一緒に教える方がより効果的である（具体的な教え方は省略）。

(3) 音声と意味を一緒に教える

発音を学ぶ最終目標は適用すること、すなわち目標言語を使って人と交流することである。音素単独では脳内で意味のあるイメージを形作るのが難しい。そのため音声と意味を結び付けたトレーニングが相応しい。並行して、その結合方略にも注意を払う必要がある（中略）。初期段階で常用語彙を身に着ければ、学生は好奇心を満たすことができ、学修に意味があると感じ、達成感も得られる。

3. 発音教育法の選択プランには以下がある(具体例略)。

- (1)模倣法 (2)図示法 (3)ジェスチャー法 (4)接近音法 (5)誇張法 (6)対比法 (7)ゲーム
(8)早口言葉 (9)聞く・話す・読む・書くスキルを併せた指導法

まとめ

ひとつの言語でそれぞれの意味を区別するための音韻数や基本文型の形式は有限だが、語彙は無限である。つまり、ある言語を学ぶ時、その言語の全ての語彙を習得することは一生かけてもできないが、有限な発音形式や基本文型を集中的に学ぶことは可能である。発音と基本文型を習得した後は、独学でもその言語をマスターできる。

言葉の発音習得は知識学習とは異なり、模倣、練習、実践が重要で、多ければ多いほど良い。この訓練を経て、目標言語の発音を自動的に聞き取れるモジュールが形成される。スキルトレーニングをメインに、知識説明は補助的に、学生たちが実践するよう勇気づけ、こまめに実践し、音声を聞くのが好きになり、勇気を出して発音するよう促すことが重要である。

二、初級段階の文型教育

1. 文型教育の枠組み(具体例略)

2. 文型教育の原則

- (1)学生中心の原則
(2)ポイントだけ説明し、練習量を多くする原則
(3)授業のコミュニケーション化原則
(4)構造—語義—語用のコンビネーション原則
(5)シナリオ化の原則
(6)楽しく学ぶ原則
(7)適切な誤り訂正の原則

3. 文型教育のステップ

導入⇒提示⇒ドリル⇒応用(具体例略)

4. 教育理論(一): 構造主義の教育理論

構造主義の教育理論

→学生主体→自主性→能動性→創造性→教師主導から→ファシリテーターへ→アドバイザーへ

構造主義の教育理論の核心的思想は以下に体现される:

- (1)学生主体: 学習者の自主性、能動性、創造性を引き出す
- (2)教師主導: 教師は教育のファシリテーターであり、アドバイザーである。

5. 教育理論(二):

反転授業(flipped classroom)の教育モデル

→授業前学習→学習動画→自己点検による練習→必要な知識とのリンクづけ

反転授業で解決できること: 授業時間不足、学生の学力差などの課題

→授業での探求→ポイントを絞った解説と演習→授業内での質疑応答→復習・まとめ

解決できること: 的を絞ったドリル練習、躓き箇所の解説、言葉の活用などの課題

- (1) 授業前学習: 学習者はビデオ、自己点検式練習、必要な知識にリンクされた教材から知識を学び、それを内在化でき、授業時間不足や学力差が大きいなどの課題を解決できる。
- (2)授業での探求: ポイントを絞った解説、質疑応答、復習・まとめを含め、より多くの時間を授業内活動に振り分け、フォーカスしたドリル練習、難しい箇所の解説、言葉の活用など、より深い学習を行う。

三、効果的な初級中国語の教学

効果的教育の「有効」とは、教師が先進的な教育理念に基づいて一定期間教育を行った後、学生が具体的な進歩や成長を遂げたことを指す。「教学」とは、教師が学生の学習を牽引し・維持・促進するために行うすべての行動と方略を言い、主に以下の三点を含む。第一に学生の学習意欲や興味を引き出すこと。教師は学生の学習意欲を引き起こすことで、学習の心理的基盤である「学びたい」「学ぶには」「学ぶのが楽しい」という気持ちを喚起する。二番目は教育目標を明確にすること。教師は学生に、「何を学ぶのか」「どこまで学ぶのか」を理解させる必要がある。三つ目は学生が理解し受け入れやすい教えかたを採用すること。具体的には、授業前の適切な準備、効果的な授業デザイン組織、授業後の効果的練習などが含まれる。

(一)授業活動の組織

1. 適切な教育ツールの選択 2. 授業活動の合理的割付 3. 授業中の質問の柔軟な選択: 続けて聞く、別の角度から質問する、励まし(具体例略)

(二)授業での質問方略

質問は授業に不可欠な要素である。効果的な質問は、学生の知識欲を引き出し、思考を広げ、学んだ知識を深く理解する効果がある。教師は授業内容や学生のレベルに合わせ、入念に質問を練る必要がある。

1. 質問の難易度は学生のレベルに合わせ、易しいものから難しい質問へ、難易を組み合わせること
2. 質問の種類は教育内容に応じ決める
3. 質問はクラス全員を対象に
4. 授業での質問は楽しさが必要
5. 先に質問をしてから学生を指す
6. 学生のレベルに合わせて指す順序を決める
7. 指された学生が回答するまで頃合いを測る
8. インタラクションの多様化
9. 誤りの訂正法
10. フィードバックのしかた (具体例略)

(三)授業リズムの調整

教師の教え方のリズム調節が適切か否かで、教育効率に直接影響が及ぶ。授業テンポが速すぎると、学生は息つく間もなく、内容理解や消化ができない。一方、テンポが遅すぎると、学生は気がたるみ、集中力を欠く。教える内容が少な過ぎると、だらだらして、時間の無駄遣いになる。反対に内容が多過ぎると、学生たちの理解能力を超えてしまい、同じく授業効率が低下する。効果的なスピードコントロールには、リラックスと緊張をほどよくミックスし、適度なスピード、科学的な授業時間配分、緻密と省略をうまく組み合わせることが必要である (具体例は省略)。

まとめ

学科の発展にはたゆまぬ追求と恒久的な努力が必要であり、継承とともに発展し、発展とともに進歩があり、進歩の中で成熟する。外国人に対する中国語教育は実践性が高い学科であり、応用研究は基礎理論と同等に重要である。今回の座談会冒頭で述べたように、初級中国語教育は発音教育、文型教育、パラグラフィー教育の3段階に分けられる。二回の座談会では、主に最初の二段階の教育に関し、教育実践の視点と目標言語の環境、および日本の教育環境の観点から検討を行った。いずれも簡単な整理とまとめであるが、参加者の皆さんの中国語教育の進歩、発展に役立つことを願っている。

参考文献とプラットフォーム情報(原文ママ)

周小兵、李海鸥 2004 《对外汉语教学入门》 中山大学出版社

崔希亮 2008 《汉语作为第二语言的习得与认知研究》 北京大学出版社

王海峰、薛晶晶 2019 日本学生汉语语音学习难度考察。语言文字应用(2), pp. 115-123。

余维 1995 日、汉语音对比分析与汉语语音教学。语言教学与研究(4)。pp. 123-141

刘珣 2000 《对外汉语教育学引论》 北京语言大学出版社

钟授 1965/1979 十五年汉语教学总结 《外国留学生基础汉语教学通讯》 北京语言学院刊物, 刘珣
2000 《对外汉语教育学引论》 所收录

语音教学参考书 王芳 2011 《汉语语音 100 点》 北京大学出版社

语音教学慕课 王瑞 《跟我学发音》

句型教学慕课 王瑞烽 《初级汉语语法》

牟世荣 《初级汉语语法进阶》

国际中文教育平台 《国际中文智慧教学平台》

付録

牟世栄教授略歴

北京語言大学漢語進修学院副院長・准教授。1988 年から北京語言大学の教壇に立ち、30 年以上の教歴をもつ。長年にわたり初級中国語教育に従事。大半がゼロレベルを含む初級中国語総合クラスの担当で、初級中国語教育に大きな貢献をしてきた。韓国（1994-1996）、アメリカ（2007-2008）、イギリス（2015-2017）、香港短期研修（2003 年 7-8 月）、日本訪問（2012 年 11 月）など、諸国での教育経験を持つ。北京語言大学は、世界のあらゆる地域から学生が集い、ほとんどのクラスが混合編成で、一般的に各クラスに 10 カ国以上の学生がいる。最多は韓国、日本、インドネシア、タイ、南アジア（パキスタン、インド、ネパール、バングラデシュなど）の学生である。主著にテキスト『成功之路・進歩篇』1 巻、3 巻、MOOC 講座『初级汉语语法进阶』。

聞亭教授略歴

北京語言大学漢語学院准教授。東京外国語大学、ニューヨークのコロンビア大学でも教えた経験がある。第二言語習得としての中国語教育に注力。『语言教学与研究』『Language Testing』など、英中学術誌に 10 本余の論文を発表。『第二言語習得研究』『国際漢語課堂管理』、中国語教材三冊、日本人向け児童書、米国学生向けテキスト、学部外国留学生向け教科書『爾雅中文』の編纂に参加。省庁レベル科研費および教育プロジェクトを 5 件主宰。北京市高等教育教学成果賞一等賞、北京市青年教師基礎教学力大会一等賞、ベストプレゼンテーション賞、ベスト教案賞、学生人気ベスト賞、最優秀論文賞など受賞。

本企画は JSPS 科研費 C（2021~2023 年）「ハイフレックス型授業の相互行為検証と PC シミュレーションに基づく実践応用(課題番号：21K00773)」の助成で実施した。

本内容に関する質問または講師との連絡希望のかたは、以下宛て連絡ください。メールアドレス：ksunaoka#waseda.jp（#を@に置き換えてください）。